

アブラゼミの羽化



18時46分

8月2日、関東でようやく梅雨明けが宣言されて暑さが増してきた頃、妻とともに近所の公園（千葉県市川市）へセミの幼虫を探しに行った。実は恥ずかしながら、今までセミの羽化をきちんと観察したことがなかった。これは生物教師としてあるまじき事態だと感じ、いざセミ探しに出かけた次第である。19時少し前の辺りが薄暗くなってきた頃、妻が数日前に目星をつけていた「他の場所よりもセミの鳴き声がうるさかった」という有望そうな公園を訪れた。公園の木の周辺を注意深く探していると、スギの幹に登っている2匹のセミの幼虫を見つけることができた。セミは一般に幼虫期間が長いことで有名で、アブラゼミやミンミンゼミの場合、2～5年も幼虫のままで土の中で過ごすようだ。何年も暗い土の中で過ごして、ようやく外に出てきた幼虫をつまみ上げるのは少々心が痛んだが、1匹家へ持ち帰って観察してみた。

20時20分、幼虫の背中が割れて緑白色の美しい成虫の体が出てきた。落ちてしまうのではないかとハラハラしたが、上手いこと体をのけぞり、尾の先まで抜け出そうとしていた。よく見てみると、白い糸のようなものが抜け殻と体をつないでいるのが見える。これは気門の脱皮殻だ。ヒトとは違って昆虫は呼吸のための器官が腹部の横にあり、脱皮の際はこの気門の中の皮までむける。ヒトで言うならば、肺の中まで皮がむけるということだ。脱皮ってすごい。



20時20分



20時37分



20時45分

20時37分、全身が殻から出終わり、脱いだばかりの殻につかまりながら羽を伸ばしていく。風で揺れるたびに殻ごと落ちてしまうのではないかと気が気でなかった。20時45分、すっかり羽が伸び切った。アブラゼミとは思えないくらい真っ白な羽が非常に美しく見とれてしまう。21時12分、羽が体を包むように角度が変わった。色は徐々に茶色くなり、模様も現れてアブラゼミらしくなってきた。この後は、形に大きな変化はないが、羽の色がどんどん濃くなっていった。翌朝起きるや否や様子を見にいくと、すっかり体が完成していた。羽化完了の一部始終を見届けることができて感慨深くなった。

昆虫はキチン質の外骨格で体の表面を固めており、脱皮をしないと体を大きくすることができない。一方で、変態（メタモルフォーゼ）という一大イベントを行うことで体の形を大きく変えることができる。特に、幼虫では未発達であった羽が羽化によって伸

びていく様子は実に神秘的で感動的だ。今がちょうど羽化シーズンなので、夏休み中にぜひ観察してほしい。

ところで、我々にとってセミは夏になれば当たり前前に現れる、ときに邪魔者扱いされるような存在だが、北欧などでは珍しい存在で、憧れの虫だという。セミのことを知らない外国人が、日本で鳴き声を聞いて「樹が鳴いている！」と勘違いしたという逸話があるぐらいだ。そんな日本が誇るべき風情あるセミたちだが、近年、アブラゼミの減少が危惧されている。原因は諸説あるがまだはっきりしていないらしい。当たり前だと思っていた生き物が、いつか当たり前ではなくなってしまうのかもしれない。



21時12分